

所属・資格 心理学科・教授

申請者氏名 巖島 行雄

研究課題		Change Blindness(変化盲)を生起させる目撃要因の検討
報告の概要	研究目的 および 研究概要	変化盲とは、視覚的に提示された日常事象における変化の見落としの現象のことである。近年、この変化盲が目撃者の識別における失敗や誤りの原因の1つとする研究も報告されるようになってきた。そのような研究では、変化前の刺激と変化後の刺激の提示時間が比較的長くても（たとえば、それぞれ3秒間の刺激提示時間）、変化盲が起こり、しかもそれが人物の場合でも起ることを報告している。この研究の文脈で、Itsukusima, Fukushima, & Hara(2017)は、先行する人物の提示が後続の刺激人物の提示によって、記憶の保持を妨害される可能性を示唆する結果を得た。このことは、変化盲の原因が逆向健忘によって起る可能性を示唆している。今回、本研究計画では、この変化盲の生起要因としての情報の複雑さ（登場人物の数）を実験的に検討することとした。
	研究の結果	今年度は変化盲の生起する条件の解明のために、人物の性差（男女）と人物が配置される周囲の情報の程度（多い：8人条件。少ない：3人条件）を変数に4条件を設定した犯罪を模した事件（教室内に残された携帯電話の置き引き）を動画撮影して、実験を行なった。実験参加者は140名の中学生であった。彼らは（35名ずつの）グループに別れて実験に参加した。刺激の動画を見たのちに参加者は6項目からなる質問に回答し、その後スマートフォンを盗んだ人物の写真識別を行なった。主要な結果は以下の通りである。1）登場人物の数の多寡は登場人物の数の記憶の正答率に影響しない。2）変化する人物が男性から女性、女性から男性という条件差も正答率に影響がなかった。興味深い結果は人の入れ替えの変化に気づいたかどうかであり、3）登場人数が少なく男から女に変わった場合に変化に気づく率が高かった。
	研究の考察・反省	変化盲の現象は元々は知覚次元での短時間提示における課題で報告された現象である。この事実は短時間における知覚情報の処理には限界があり、十分な知覚処理ができないために起こるとい説が展開されてきた。しかし、目撃証言心理学の文脈で行われる研究では人物の変化盲が、比較的長い時間（数秒間）でも起こり得ることを示してきた。今回の研究は、変化盲の対象となる人物以外の周辺の情報の密度（複雑性）が変化盲の生起要因であることを明らかにした。この点は重要な発見であるが、実際のところシーンにおける人物の数がコントロールされた研究であったが、今後は背景要因への注意の配分等がどのように影響するのかを検討する必要がある。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。 法と心理学会第20回大会（本年10月に慶應義塾大学で開催予定）にて大会発表予定である。
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	